

哲学カウンセリング・トレーニング体験記

—V・チェルネンコ氏と同僚たちとの
1年7か月を振り返って—

水谷みつる

1. V・チェルネンコ氏との出会い

私は2016年8月末より、ロシア在住のヴィクトリア・チェルネンコ氏とその同僚たち（他のトレーニング受講生を含む）から、オンラインで哲学カウンセリングのトレーニングを受けている。途中、個人的な事情により2回の中断を挟んでいるが、1年7か月のあいだに50回ほどのセッションを重ねてきた。本稿では、その体験について報告したい。

きっかけは、同年8月にスイスのベルンで開かれた第14回国際哲学プラクティス学会（The 14th International Conference of

Philosophical Practice [ICPP] 2016）に参加したことだった。私は、松山侑生、大谷賢治郎、私の3人で構成する哲学ドラマ・コレクションとして、松山とともに哲学ドラマ・ワークショップについて発表した。

すべての発表が終わった最終日、ワインを片手に談笑している時だった。たまたまチェルネンコ氏と話になった。チェルネンコ氏は、2015年に来日しており、東京ほかでワークショップを行なっている。私は参加できなかったが、個人セッションを受けた人から様子を聞いていた。畳み掛けるように質問され、追い詰められて

泣いてしまったという話だった。それで、「あなたのセッションはきついと聞いている」と言うのと、「やってみる？」と笑顔で問いかけられた。私は内心、恐れつつも、何事も経験と思って「イエス」と答え、連絡先を交換してその場は別れた。

その年は、哲学プラクティス連絡会の大会が8月28日だった。翌29日にチェルネンコ氏とのセッションを控えていた私は、不安を払拭すべく、氏を知る人たちに「明日、セッションなんです」と言って歩いた。ところが、ポジティブな反応があまりなく、ある人には「彼女（のセッション）は、泣くか、怒るか」だから覚悟するようにとさえ言われ、ますます恐ろしくなった。

2. 初めてのセルフ・コンサルテーション

1) 問いを短くはっきりさせる

そうして戦々恐々としたまま迎えた初めてのセッションだっ

たが、予想とはまるきり逆に、とてもおもしろく、楽しいものだった。1年半以上も前のことで記憶も曖昧だが、当日、使用したgoogleドキュメントのコピーが残っているので、それをもとに内容の再現を試みる。ただし、チェルネンコ氏の問いはすべて口頭で発せられ、それに対し、私が回答をドキュメント画面に書き込んでいくかたちだったので、氏の問いに関しては記憶をもとにした再構成であり、正確ではないことを予めお断りしておく。

セッションは、「セルフ・コンサルテーション」と呼ばれるものだった。「セルフ」と名にあるように、クライアントが哲学プラクティショナーと対話しながら、自ら立てた問いを、自ら問い返し、解きほぐして、その前提を露わにし、併せて自らの思考パターンを明らかにしていく。時間は、1時間半だった。

問いは、予め一つ決めておくように言われていた。私は「何もで

きないなら自分は死んだほうが
いいと考えることと、他者に対し
て、何もできないなら、死んだほ
うがいいと考えることのあいだ
には、違いがあるか？」という長
い長い問いを立てた。

背景には、1 か月前の 7 月 26
日に起きた相模原障害者施設殺
傷事件があった。重度障害者に生
きる価値はないとした植松被告
の主張は衝撃だったが、同時にま
ったくの他人事として切り捨て
られるものでもなかった。10 代か
らずと消えたい、死にたい願望
を抱え、精神科通院歴も十数年を
超える私は、これまでどれほど、
自分など何もできないし、生きる
価値がないから、死んだほうがい
いと思ったかわからない。だが、
たとえ向かう先が自分であっても、
何かができることに生きる価値
を置き、価値がなければ死んだ
ほうがいいとする考え方は、命に
優劣をつけ、その選別を肯定する
優性思想であり、根底において植
松被告の主張とつながるもので

はないのか。相模原の事件以降、
そうした自問自答と希死念慮を
抱くことへの罪悪感が頭を離れ
なくなり、それが当初の問いにつ
ながった。

私は、セッションでは、この問
いについて対話し、考えていくの
だと思っていた。ところが、チェ
ルネンコ氏からまず言われたの
は、「この問いを短く簡潔にした
らどうなるか？」ということだっ
た。私は戸惑いながらも、「自分
自身も含め、何もできないなら、
人は死んだほうがいいと考える
ことは許されるか？」と書き直し
た。だが、それでも充分ではなく、
何を問いたいのか、もっとはっき
りさせるようにと重ねて言われ
た。そこで、「自分自身も含め、
何もできないなら、その人は死ん
だほうがいいと考えることは罪
(sin) か？」ともう一度、書き直
した。

すると今度は、「こうやって簡
潔に書ける問いを、なぜ最初はあ
のように長く書いたのか？」と聞

かれた。「正確を期したかったから」と答えると、「なぜ正確を期したかったのか？」と重ねて問われた。そうしてやりとりを重ねた結果、チェルネンコ氏のコメント欄には、「みつるは正確でありたいと願っている」「みつるはネガティブなことや他者の気分を害することを恐れている」「問いは、できるだけはっきりとした短いものにすべきある」といった言葉が並ぶことになった。

ちなみにコメント欄には、大きく分けて2種類の事柄が書かれる。まず、対話を通して私(=クライアント)について露わになったことが、「みつる」(=クライアントの名前)を主語に書かれていく。そして、書かれる度に「同意するか?」「実生活でもそうか?」「自分にとって新しいことか?」などと聞かれる。また、こうしたセッションを行なうに当たって留意すべき事柄も、出てくる度に書き加えられていく。たとえば、「問いをより簡潔にするために、否定

形は使わない」「問いは、つねにそれだけで成立する(self-sufficient)ものにする」などである。

2) 問いの前提を洗い出す

これ以降のセッションは、「自分自身も含め……考えることは罪か?」という、書き直された問いをもとに進んだ。まず聞かれたのは、「この問いを立てた人は、どのような前提を持っているか?」ということだった。それを「みつる」を主語に書き出していくように言われた。

私はそれほど苦勞することなく、「みつるは、生きることを許されるためには、何かができないといけないと考えている」「みつるは、死ぬことが問題の解決になり得ると考えている」と書いていった。だが、この時点で私は、「私(I)」ではなく、「みつる」を主語に書くということの意味をあまりよく理解していなかったと思う。

10 個目に「みつるは自分が、植物状態での生が生きるに値するものであるかどうかわからないと思っていることを認めたくない」と書いた時のことだった。チェルネンコ氏に問い直され、改めて元の問いに照らして考えて、この言明を成り立たせるのに十分な情報が元の問いにはないことに気づいた。私は、問いから問いを立てた人「みつる」の持つ前提を推論するのではなく、私が内側から知っている「私」を参照し、「私」の持つ前提を挙げていたのだ。そこで改めて考え直し、11 個目として、「みつるは、何かを達成できないなら、自分の人生は生きるに値するかどうかかわからないと思っている」と書いた。でも、もうそれ以上は何も思いつかなかった。

すると今度はチェルネンコ氏が、私に代わって、「みつるは道徳的な問題に心を奪われている」「みつるは罰を恐れている」「みつるは物事をドラマ化する傾向

がある」「みつるは死の問題に心を奪われている」と書いた。そして一つひとつ書く度に、同意するか尋ねた。どれも心当たりのあることだったので、私は苦笑しながらも「イエス」と答えるほかなかった。なかでもとりわけ凶星で大笑いしたのは、「みつるは物事をドラマ化する傾向がある」だった。ずばりと痛いところを突かれ、むしろとても小気味よかった。

3) 問いに問いを返す

次に課題として出されたのは、「自分自身も含め……考えることは罪か？」という問いに対し、返す問いを立てることだった。私は、「人はつねに有能で有用でなければならぬと思うか?」「私たちは生きることを無条件に許されているか?」「能力と死はまったく異なるものなのに、なぜあなたはこの二つを結びつけるのか?」の3つを書いた。

ところが、この最後の問いが引っかかった。チェルネンコ氏に問

い直され、私はようやく「能力と死はまったく異なるものなのに」は不要だと気づいた。「なぜあなたは能力と死を結びつけるのか？」だけで、この問いは十分に成立するのだ。なのに、「なぜ不要なものをつけ加えたのか？」すかさずそう尋ねられ、私は改めて、自分の正確さへの過度なこだわりを突きつけられることになった。

その後、やりとりは再び、問いに返す問いを立てるという課題に戻った。だが、私はもう何も思いつかず、チェルネンコ氏が代わって、「あなたには物事をドラマ化する傾向があるか？」「あることが罪か否かは誰が決めるのか？」「あなたは有用でありたいと願うか？」という3つの問いをつけ加えた。

4) 返された問いに応答する

次にチェルネンコ氏は、上記で立てた6つの問いから一つを取り上げ、「あることが罪か否かは誰

が決めるのか？」と聞いた。以下はその後のやりとりである。

「あることが罪か否かを一人で決める人は誰もいない」

「ならば、それを決めるものはあるか？」

「ある。結果が有害だったら、罪になり得る」

「問いに答えていると思うか？」

「思わない。あることが罪か否かを決めるのはその結果であると言うべきだった」

「まだ何の結果にも至っていなくても、ある行為がそれだけで罪になることはあるか？」

「行為は必ず何らかの結果をもたらすが、思考はそうではない」

「問いに答えていると思うか？」

「思わない」

私が論点をずらして答える度に、チェルネンコ氏が「問いに答えていると思うか？」と尋ね、私が自分で気づくよう促していることがよくわかる。また、「……決めるものはあるか？」「まだ何の結果に至って~~いなくても~~……」

と、そこまでのやりとりにない新たなコンセプトを提示し、私に視点の転換を促しているのも特徴である。

そうしたやりとりの末に私は、「あることが罪か否かを決めるのは、人ではなく、結果もしくは結果の蓋然性である」と書き、「…は誰が決めるのか？」という問いへの最終的な回答とした。

5) 再び問い返し、応答する

続けて今度は、この回答に対して、どのように問い返すかを聞かれた。私は「罪になる結果とは何か?」「ある結果を罪だと誰が決めるのか?」「結果の蓋然性をどうやって知るのか?」と書き、再び3つで力尽きた。そこにチェルネンコ氏が、「あなたは時に、物事を重く考え過ぎることがあるか?」「あなたは時に、外部にパワーを分け与え過ぎることがあるか?」の二つを書き加えた。

そしてその5つのなかから、また一つを取り上げ、「罪になる結

果とは何か?」と聞いた。それに対し、私が「誰かもしくは何かが傷ついたなら、それは罪になる結果である」と答えると、「医師は時に人を傷つけることがあるか?」とまた問いが返ってきた。

残念ながらここでちょうど時間となり、この問いは投げかけられたままになった。だが、もっと時間があれば、問いを立て、回答し、点検し、議論を練り上げ、また問いを立て、回答し……というこのサイクルをずっと続けられたらだろう。

6) 振り返り、気づきを書く

最後に、セッションを振り返って感想もしくは気づいたことを書くように言われた。私は以下を含む6つを書いた。「問いや答えをできるだけ短くはつきりとしたものにするには役に立つし、楽しいとさえ思った。どんどん細部に入っていってしまう自分のいつものパターンを抜け出す助けになった」「『みつるは象徴的な

自死を楽しんでいる』といったネガティブに聞こえ兼ねないコメントも、嫌に感じなかった。たぶん細部が削ぎ落とされているからだと思う。「みつるについてわかったことは、自分にとっては新しいことではなかった。でも、いままでよりもずっと簡潔なフレーズで、はっきりとそれらをとらえられるようになった」「哲学カウンセリングにも、楽しくておもしろい瞬間があるとわかった」

「楽しい」「おもしろい」といった言葉が並んでいるが、実際、笑いに満ちた、わくわくするセッションだった。何より、「何もできないなら……違いがあるか？」という当初の長たらしい問い（というより悩みもしくは強迫観念）について、一切、直接的に話さないのが新鮮だった。にもかかわらず、背景に罪業意識へのとらわれや、物事をドラマ化し、痛みや傷つきを大事にとらえる傾向があることが露わになり、「罪とは何か？ 誰が、もしくは何が、決め

るのか？」について、対話し、考えることができた。これは、驚きだった。

「みつるは」で始まる文章は、最終的には 25 個になった。たった一つの問いから、これだけのことをロジカルに引き出せるとは思ってもいなかった。感想にも書いたように、ほとんどは以前から自覚していた、もしくは薄々、気づいたことで、認めたくなくて目を逸らしていることだった。しかし、簡潔にずばりと指摘されると、ズキリとした痛みとともに、何か清々しさのようなものが湧いてきて、かえって笑って受け入れることが可能になった。そう思える自分も新鮮だった。

7) 医療・心理相談とは違うおもしろさ

1) で少し触れたが、私は、十数年以上にわたり、精神科に通院しており、さまざまなカウンセリングやセラピーを経験している。そうした医療・心理相談では、通

開拓の扉

常はまず、その時、困っていることを説明し、それにまつわる感情も話す。というより、多くの場合、困りごとと感情は一体となって、自分では解きほぐせない状態になっているので、どちらか一方だけを話すことはなかなかできない。その後の展開は、その専門家（医師、カウンセラー、セラピストなど）の持っている技法や技量に大きく左右されるので一概には言えないが、相手に力量がないと、事柄も感情もごちゃ混ぜにただただしゃべって終わりになりがちである。もちろん、優れた力量をもつ専門家もいて、的確な応答や技法（たとえば認知行動療法や EMDR など）の駆使によって、問題が整理され、感情が癒されていくこともある。

一方、チェルネンコ氏のセルフ・コンサルテーションでは、クライアントには問いの背景やそれにまつわる感情を説明する機会は与えられない。問いさえ、枝葉末節を削ぎ落として、骨格のみ

にするように求められる。しかし、その骨格に論理の光を当て、前提を洗い出し、問い直すと同時に、その問い方や論じ方をも併せて読み解いていくことによって、元々の問いは解剖され、解体されていくのである。少なくとも私は、罪悪感やら恐れやら、いろいろなものが一緒くたになって、まるでお化けみたいに膨らんでいた問いモドキが、穴を開けられ、適正サイズに萎んで、各々の要素に分けられていくように感じた。それがとてもおもしろかった。

でも、もし私が、ふだんから医療・心理相談を受けていなかったらどうだっただろう？ もしかしたら、問いについて直接的に話せないことにストレスや苛立ちを感じたかもしれない。「みつるは」で始まる文章も、断定的で侵襲的に過ぎると感じて、拒絶したくなっただろうかもしれない。「こんなふういきなり言い切る医療・心理職はいないから、痛いけれどおもしろい」などとは、もちろん思

っていなかつただろう。楽しいとは思えず、続けてトレーニングを受けてみようとは思ってもよらなかった可能性もある。

けれども、私は楽しかった。それで、セッションを終える前にトレーニングについての簡単な説明を受け、「やってみたいか？」と聞かれた時に、後先も考えず「イエス」と答えてしまった。そこから、「考える」トレーニングが始まった。

3. トレーニングの実際

1) 問いに対し、仮説を立て検証する

ここまで紙幅の約半分を使って、初めて受けたセルフ・コンサルテーションを詳しく紹介してきた。なぜなら、セルフ・コンサルテーションこそ、実際の哲学カウンセリングにもっとも近いと思われるからである。これから紹介するさまざまなエクササイズは、そのための訓練と私は理解している。

トレーニングを始めて最初に出された課題は、寓話的な物語を読み、それについての問いに答えるというものだった。たとえば、死の天使に出会って恐れた男が、ソロモン王に頼んで風の力でインドに逃れたものの、実は死の天使は翌日、インドで男の命を奪う予定になっていた、といった物語を読む。それに対し、「なぜ死は天使によって表象されているのか？」「男は本当は何から逃れようとしていたのか？」といった理解するための問い (Comprehension Questions) と、「私たちはなぜ死を恐れるのか？」「死は生の一部か？」といった深く考えるための問い (Reflection Questions) が、10個ずつ出される。

それぞれの問いに対し、答えとして少なくとも3つの仮説を立て、仮説が成立するかどうか検証する。論証が不十分なために成立しないのであれば、まず何が問題かを同定する。たとえば、論拠に誤

開拓の扉

りがある、文章のある部分と別の部分のあいだにつながりがない、などである。そして、仮説が成立するまで書き直す。その過程で、仮説に無理があり、成立不可能とわかれば、放棄する。

また、仮説一つひとつに対し、その仮説を一言で表わすコンセプトを同定する。たとえば、「私たちはなぜ死を恐れるのか？」という問いに対し、私は5つの仮説を立てたが、それぞれのコンセプトは「ホメオスタシスに反する」「喪失」「不可知性」「予測不可能性」「不可避性」であった。コンセプトを同定することによって、言明の主旨を明らかにするというこの手法は、さまざまな課題において繰り返し出てくる重要なものである。

また、問いへの答えだけでなく、答え方や論証の仕方がすべて吟味の対象になる点も、あらゆる課題において共通の重要な特徴である。そうした吟味を通じて、クライアントについてわかったこ

とや、抽出された留意事項は、セルフ・コンサルテーションの際と同様、コメント欄に書き込まれていく。後者の例としては、「思考は流動的でフレキシブルだが、意見や感情は滞る」「論証する必要があるかないかは、コモンセンスに照らして判断する」「弁証法的に考える」「最初に思い浮かぶ仮説は、たいてい自分にとってもっとも自然で自明のものであり、2番目、3番目となるほど、思考の産物となる」「本質的なものと偶発的なもの、一次的なものとは二次的なものを区別する」などが挙げられる。

2) 問いを立てる

次に取り組んだのは、問いを立てる訓練だった。1)と同様、寓話的物語を読んで、今度は、理解するための問いと、深く考えるための問いを10個ずつつくっていく。また、絵画作品についてこの2種類の問いを10個ずつつくるという課題もあり、実は現在、取

り組んでいるところである。

さらに、想定上のクライアントが出した問いに対し、返す問いを立てるという課題もあり、これも最近、取り組んだばかりである。たとえば、「私は結婚すべきか？」「人類を助けるために何ができるか？」といった問いが示され、それに対し、問題を提起する問い（**Problematising Questions**）、より深く考えるための問い（**Deepening Questions**）、問い手がどんな人かを考えさせる問い（**Conceptualization Questions**）を3つずつつくる。元の問いが「私は結婚すべきか？」であれば、順に、「この問いを發した人は、利己的か？」、「人生において結婚より大事なものはあるか？」、「『私は結婚したいか？』ではなく『私は結婚すべきか？』と聞く人は、どんな人か？」がそれぞれの問いの例となる。

問いを立てる際のポイントは、問いの目的を意識しつつ、焦点が明確で、ずばりと核心を突くよう

な問いを立てることである。立てた問いがよい問いかどうかを検証するには、答えとして3つずつ仮説を立て、それぞれのコンセプトを同定するといった方法がある。一つしか答えがない問いや、二次的あるいは表面的な問題にしか触れていない問いは、よい問いではない。オープン過ぎて何でも言えてしまうような問いも、受け手に考えさせることにつながらず、望ましくない。オープン・クエスチョンとクローズド・クエスチョンを適度に取り混ぜ、使い分けることも重要である。

物語や絵画などの場合、細部にこだわり過ぎず、大きな視野で見えて、作品に固有の事柄と、一般論の両方を意識することが肝要である。また、作品のなかには直接、出てこないような、新たなコンセプトを提示することも大切である。これは、物語や絵画をもとにしない場合も同様で、セルフ・コンサルテーションでチェルネンコ氏が実践していたように、新た

なコンセプトの導入によって、受け手に視点の転換を促すことが可能になる。たとえば、「私は結婚すべきか？」という問いに対し、「この問いを發した人は、利己的か？」と問い返したとしたら、受け手はそれまで考えてもいなかった、「結婚すべきか」という問いと「利己性」との関係について考えなければならなくなるだろう。この場合、「利己的」が新たなコンセプトになる。

3) 哲学者の言葉を読み解く

哲学者の書いた文章を精読する訓練もある。これまでに取り上げられたのは、ニーチェとショーペンハウアーだった。ちなみに私はアートがバックグラウンドで、哲学は学んだことはなく、ニーチェもショーペンハウアーも読んでことはない。

ニーチェは、『ツァラトウストラかく語りき』第一部から「戦争と戦士について」が取り上げられた。最初に出された課題は、冒頭

から一段落ずつ読解していくというものだった。一段落と言っても、それぞれ2行程度の短いものである。

私は書き出しの「われわれは最高の好敵手から手加減されたくない。こころの底から愛する者たちからも、そうされたくない。だから諸君にむかっては真実を語ることを許してくれ」(佐々木中訳、河出文庫)から躓いた。英訳の *spare* という単語をどう解釈したらよいのかわからず(日本語の「手加減」ならもう少しイメージしやすかっただろう)、迷いながら「我々は、よいライバルだと思っている人や愛している人から、命を救われたくない」と書いたら、ただ言い換えているだけと言われたのだ。それで、次には思い切って、「もし殺されるなら、我々は尊敬している人に殺されたい」と書いたら、今度は拡大解釈だと言われた。そこから、「最高の好敵手とは何か？」など、鍵となる概

開拓の扉

念の検討が始まり、長いやりとりを経て、最後にようやく、「我々は、尊敬する人や愛する人から弱い人間として扱われたくない」という解釈に辿り着いた。

これを2段落やったところで、私があまりに苦勞していたためか、課題が変わった。新たな課題は、再び一段落ごとに、「コンセンサス (CS) はニーチェ (N) に同意するか? もし同意しないなら、CS と N の対立点は何か?」を論じるというものだった。まず、CS と N のそれぞれのコンセプトを同定し、それから違いを論じるという順番で作業を進めていった。

たとえば、2段落目の「戦いのなかで出会った、わが兄弟たちよ。わたしは諸君をこころの底から愛する。わたしは諸君に似ているし、似ていた。そしてわたしは諸君の最高の好敵手だ。だから諸君にむかって真実を語ることを許してくれ」(同上)に

ついて、私は最終的に、CS のコンセプトを「調和を好む」、N のそれを「挑戦を好む」とした。そして、「CS は N に同意しない。CS によれば、我々は調和を好み、したがって戦い合う人を愛することはできない。しかし N は真逆のことを言う。なぜなら、彼はお互いに挑戦し合うことを好み、我々はそうすべきだと考えているからである」と書いた。

ショーペンハウアーは、『意志と表象としての世界』の一部が取り上げられた。一段落をさらにいくつかに分けたまとまりごとに要点を記していくという課題だったが、ニーチェのアフォリズムの文体を読解するより、遙かにやりやすかった。

こうした読解課題に取り組む過程で何度か言われたのは、抽象的な概念に対しては具体的な例を、具体的な例に対して抽象的な概念を考えるように、ということだった。具体的な例を挙げられて初めて、抽象概念の理解

が確かなものになる。だから、抽象的な思考と現実の生をつねに往還させて考えるようにと言われた。また、文字通りの意味や細部にこだわり過ぎる私の思考パターンが、他の課題の際と同様に明らかになり、テキストから離れず、しかし大きな視野で見て、何が核心かをしっかりと掴むようにと再び指摘された。

4) クライアントの思考パターンを読み解く

問いに対するクライアントの回答を読んで、クライアントの思考パターンを読み解くという課題もある。はじめに、問いと回答のセットが20個ほど提示される。実在のクライアントの回答なのか、一種の想定問答集なのかはわからないが、そこには、「以下の問いに答え、論拠を述べなさい。あなたは、心と理性のどちらをより信用しますか?」「心。心は真正で、私を騙さない」といった問いと回答が並んでいる。

その一つひとつの回答について、回答の仕方や論拠の述べ方から観察できること（Observations）と、そこから解釈できること（Interpretations）を可能な限り書き出していく。たとえば、上記の「心。心は真正で、私を騙さない」という回答について、「シンプルで短い回答である」「心についてのみ語っており、理性については何も語っていない。比較がない」と言うのは、観察に当たる。だが、「この人は上手な書き手ではない」と言うのは、主観的な意見であって、観察ではない。

一方、解釈とは、観察から導き出されるその人の思考パターンのことである。「この人は直感的に考える」「この人は主観的な人である」などがそれに当たる。しかし、回答者が心と理性のうち心にのみ言及しているからと言って、「この人は怠け者である」と言うのは、拡大解釈になる。また、「この人は真正さを信用してい

開拓の扉

る」は、回答の内容に触れる言明であり、回答の仕方や論拠の述べ方の観察に基づく解釈とは言えない。

こうした作業をすべての問いと回答のセットについて行なったあと、観察と解釈のリストを見直して、繰り返し出てくる事項を抜き出す。そして、そこから、回答者の思考パターンを導き出すのがこの課題のゴールである。上記の回答者の場合、「この人は批判的な思考の持ち主ではない」「この人は独断的である」といった思考パターンを抽出することができた。

5) セルフ・コンサルテーション

セルフ・コンサルテーションについては、すでに詳しく述べたので、ここでは繰り返さない。だが、すべてのセルフ・コンサルテーションが同様に進むわけではない。

チェルネンコ氏の師匠のオスカル・ブレニフィエ氏の場合、私が書きたいいくつかの前提につい

て、証明 (Demonstration) するように求められた。証明が不十分であれば、問題を同定し、成立するまで書き直す。そうしたことを繰り返していたら、問いの前提を洗い出すだけで予定時間が過ぎた。

一方、問いの前提を書き出す作業はせず、問いに返す問いを立て、その目的を同定することを中心に進んだセッションもあった。進め方に、一定のルールはないようである。

6) 哲学プラクティショナー役を務める

クライアント役を前に哲学プラクティショナー役を務めるというロールプレイも、これまで何回か経験した。チェルネンコ氏は比較的すぐに哲学プラクティショナー役を経験させる方針のようで、トレーニングを始めてまだ7回目で、いきなりやるように言われた時には仰天した。寓話的物語を読んで問いに答えるセッシ

開拓の扉

ョンを実施したが、緊張のあまりしどろもどろになり、惨憺たる結果に終わった。

チェルネンコ氏（および師匠のブレニフィエ氏）の推進するタイプの哲学カウンセリングでは、哲学プラクティショナー側の思考の明晰さが徹底的に重要である。トレーニングの過程で、何人もの哲学プラクティショナー（役）とセッションを持ったが、相手の問いや指摘が、少しでも不明瞭だったり、的を外していたりすると、こちらは混乱するし、大きなストレスになる。

哲学プラクティショナー役になった場合は、クライアント役の論証が成立しているか否か、素早く的確に判断し、問題を同定したうえで、クライアント自身に気づかせるよう、問いを返していかなくてはならない。とくに難しいのは、クライアントの視点を転換させるような、新たなコンセプトを提示することである。これができるようになるには、当然、哲学プ

ラクティショナー側が自在に思考を転換できるようにならなければならない。

そのうえで、適切なペースでセッションを運ぶことが求められる。クライアントに挑戦することを恐れるなどと言われるが、あまりに畳み掛けるようなペースだと、クライアント側にストレスや反発が生じ、かえって思考が働かなくなる恐れがある。かと言って、遠慮しがちな進行では、このメソッドそのものがもつダイナミズムが失われる。実に難しい。

4. まとめに代えて

初めてのセルフ・コンサルテーションがあまりに楽しかったために、受講後にどのように応用するかまでよく考えずに始めてしまったトレーニングだが、正直に言えば、受ければ受けるほど難しさを実感している。

まず、上に書いたように、哲学プラクティショナー側に要求される資質や技術の水準が非常に

開拓の扉

高い。また、クライアントに挑戦し、考えさせることに主眼を置くメソッドの厳しさもある。たとえば、チェルネンコ氏は、思考の明晰さに加え、あたたかさもユーモアもあり、哲学プラクティショナーとしてとても優れていると個人的には思う。しかし、冒頭に書いたように、氏のセッションに対してさえ、「泣くか、怒るか」だという批判的な評価がある。また、クライアントの問いを直接、取り扱わないという点についても、当然ながら賛否があるだろう。

今回、私はあくまで体験記として本稿を書いた。力不足で、今後の展望や応用可能性にまで触れられなかった点は、どうかご容赦いただきたい。もし読んで興味をもってくださいる方がいるなら、勉強会を開くなどして、ともに応用可能性を探っていければと思う。